

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
共同プロジェクト研究  
2021年度研究【経過・**成果**】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名			
	異文化コミュニケーション学部・教授		細井尚子			
研究課題	「東アジア文化圏」研究基盤の構築—娯楽市場における「大衆」「演劇」「大衆演劇」から—					
研究組織 (研究代表者・研究分担者) 2022年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名			
	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授		細井尚子			
	明治大学・文学部・兼任講師		中野正昭			
	早稲田大学・講師(任期付)		宮信明			
	大阪大学大学院・文学研究科・准教授		輪島裕介			
早稲田大学・演劇博物館・助教		後藤隆基				
研究期間	2018年度 ~ 2020(2021)年度					
研究経費※ (上段:支出金額)	2018年度	2019年度	2020年度	(2021年度)	総計	
	1,275,000 円	1,807,865 円	173,000 円	896,348 円	4,152,213 円	
(下段:採択金額)	1,275,000	1,810,000	2,385,000	—	5,470,000	

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

中華文化の影響を基層に有する東アジア文化圏は地理的には非西洋だが、19世紀に西洋と向かい合い、20世紀には「近代日本」の空間に覆われた時間をもつ。西洋及び「近代日本」で翻案された西洋との圧力的接触、咀嚼、自己化という過程を経てどのように自己の近代を实体化したか、また20世紀後半以降、娯楽市場で現出したグローバル化現象によって読み直される近代の表象について、東アジア間に存在する「大衆」「大衆演劇」「大衆娯楽」概念の相違と共有を探りつつ、社会変容を随時反映して更新を本質とする「大衆演劇」「大衆娯楽」から明らかにし、当該文化圏の独自性に立脚した分析・理論を模索し、「東アジア文化圏」研究基盤の構築を目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[東アジア文化圏] [近代] [大衆娯楽]

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本共同プロジェクト研究は、申請時の研究計画では、最終年度に当たる 20 年度は前後半に分け、前半は単年度テーマに取り組み、後半は初年度。第二年度の各単年度成果と統合して、総体成果としてまとめ、研究目的を達成する構想だった。しかし新型コロナウイルスの感染状況の影響を受け、20 年度の当初計画が遂行できなかったため、1 年間の研究期間延長をお認め頂いた。研究分担者の面では、本プロジェクトが強化したいと考えていた新興劇・新演劇分野(特に発祥地である関西圏の状況)の担当として 20 年度に加わって頂いた後藤隆基先生は 21 年度も継続して担当、18 年度から研究分担者であった森平崇文先生は所属機関の研究活動の関係で 20 年度限りとなった。

21 年度は本来 20 年度の研究計画を遂行すべきだが、20 年度同様、コロナ禍による諸制限がすぐには解除されない状況であったため、年度開始後の研究会で、前半は研究メンバーは 20 年度に設定した単年度テーマ(娯楽市場における商品としての側面、各国・地域の演劇・芸能史における位置づけ)から個人の分担テーマに取り組むこととし、夏季以降の研究計画について再検討した。当初は 9 月に本学で国際論壇、12 月に台湾・台北芸術大学で国際シンポジウムをリアル開催する計画だったが、研究集会の開催はオンライン形式で行うこととした。また、20 年度 12 月の国際シンポジウムでは、若手研究者の育成を目的に 2 名(日本・台湾各 1 名)の博士課程在籍者の発表枠を設けたが、これを拡大して夏の国際論壇を若手研究者のための国際論壇として、「東アジア大衆演劇若手研究者国際論壇(東アジア大衆演劇青年學者国際論壇)商業と芸術の間(商業與藝術之間)」と題し、7 月 10 日(土)11 日(日)に開催した(主催:本プロジェクト研究、台湾・台北芸術大学、東亜大衆演劇研究会(東アジア大衆演劇研究会)、共催:本学アジア地域研究所。)発表者はメンバーが候補者を推薦、7 名(日本 4 名一本学 1 名、明治大学 2 名、大阪大学 2 名、台湾・台北芸術大学 3 名)が発表した。韓国、中国からはメンバー自身の所属先異動等により、適切と判断された候補者が推薦されず、日本・台湾のみになったのが残念に思われる。この国際論壇では、若手研究者の研究発表に本共同プロジェクト研究のメンバー(研究協力者を含む)がコメントを担当し、質疑応答も行われた。発表内容はいずれも興味深く、12 月の国際シンポジウム「移轉的大衆演劇:民衆記憶的顯影與體制的重建(移行する大衆演劇-大衆の記憶の表象と制度)」(主催:台湾・台北芸術大学、東亜大衆演劇研究会。共催:本プロジェクト研究、本学アジア地域研究所)で、メンバーと同様の扱いで若手研究者の発表の場を設けることとなった(日程の都合が合わず、1 名のみ辞退)。国際論壇での発表を更に精練・発展させた発表もあれば、異なるテーマに挑戦した発表もあり、演劇史及び演劇研究において、大衆的であること(継承・蓄積よりも更新・変容を本質とする)、常に「今」を反映。吸収し、進行形であることから、研究対象として取り上げられにくい大衆演劇研究の若手研究者育成の面で、一定の成果はあったと考えられる。

12 月 10 日(土)11 日(日)に開催した当該国際シンポジウムは、主催の台北芸術大学所在地である台湾居住者は台北芸術大学で参加、非台湾居住者はオンライン参加というミックス型となった。20 年度の国際シンポジウムの経験から Webex を使い、また通訳を逐次から同時通訳に変更することで時間的な短縮を図り、若手研究者 6 名を含む 18 名(日本 8 名一内若手研究者 3 名、台湾 8 名一内若手研究者 4 名、中国 1 名、韓国 1 名)が発表を行った。通常、国際シンポジウムでは、タイトル及び開催母体の研究プロジェクトに関連する内容を研究する研究者に基調講演を依頼するが、当該シンポジウムでは松竹株式会社岡崎哲也氏(常務取締役他、歌舞伎の制作に長年従事)に「如何確保『現存傳統戲劇』的商業運作——松竹演劇的民間傳統與商業機制」『生きている傳統演劇』をビジネスとして成立させるには」と題する講演をお願いした。これは 20 年度に行う予定であった日本型の興行システムを構築した松竹株式会社の興行戦略やコロナ禍対応による現場の状況

**研究【経過・成果】の概要** (つづき)

などの資料収集の延長上にあり、また、個別テーマ研究及び研究会での意見交換などで度々言及された現代の娯楽市場における伝統芸能の在り方についての関心にも応えるもので、歌舞伎を例に、今までの歌舞伎を巡る状況と戦略、伝統演劇である歌舞伎を商業演劇として現在の娯楽市場で機能させる工夫、コロナ禍での対応など、経済的な面などについても具体的に言及され、一民間企業が伝統演劇である歌舞伎を支えている(1960年代まで人形浄瑠璃も松竹が支えていた)という日本独特な状況に対する驚きもあって、活発な質疑応答が行われた。開催日程が2日しかとれなかったため、1日の次第が9~10時間に及んでしまったが、充実した内容となった。尚、当該シンポジウムは台湾側主催であるが、本共同プロジェクト研究の最終年度に当たるため、論文集は本学の機関リポジトリで公開する(2022年4月)。この論文集に収録した論文は、シンポジウムで得たコメント、質疑応答を経て、予稿集として提出した論文を修正・補強したものとなっている。

また、21年度の研究成果の還元の一つとして、本学全カリ総合科目で春学期「大衆演劇の世界」、秋学期「演芸の世界」を1回3コマ集中、計5回で開講した。「大衆演劇の世界」は初回のみ教室で他はオンライン授業、「演芸の世界」は初回・2回目がオンラインで以降は教室で開講となったが、本共同研究プロジェクトのメンバーが講師を担当し、研究成果を還元した。また、「大衆演劇の世界」では、松竹の岡崎氏をゲストスピーカーで招き、松竹を事例に興行システムについて紹介して頂いた。

本共同プロジェクト研究は、年度ごとのテーマに沿い、メンバー個々が自己の研究対象に新たな視点から取り組み、研究会及び年2回の国際研究集会で共有・意見交換をする形で進めてきた。申請時に目的として掲げたのは以下の2点である:

- 1) 「東アジア文化圏」の娯楽市場における「近代」の表象を明らかにする。
  - 2) 「東アジア文化圏」の独自性と東アジア各国・地域の独自性を分離し、「東アジア文化圏」の独自性に立脚した分析・理論を模索し、「東アジア文化圏」研究基盤の構築に繋げる。
- 1) については何かが明らかになれば、新たな問題が抽出できるという形で、研究期間中、継続的・発展的に取り組んだ。
  - 2) については東アジア文化圏の芸能研究の際に、特に20世紀前半時期は、日本の影響という視点から眺める傾向があるのを意識的に排除した。日本については東京だけを取り上げて論じるのではなく、特に近世までの興行の中心地であった関西圏、及び歌舞伎で言えば大芝居・小芝居の二層ではなく中芝居のみで、東アジア文化圏に巡業に出るルートでもあった九州の娯楽市場にも注目し、各地域の文化を踏まえた研究を行うことで、「近代日本」空間下に置かれた東アジア文化圏各地(東京も含む)の芸能研究を、いずれかが優位に立つ形ではなく比較する手法が徐々に形成できた。また、こうした視点・姿勢による研究を若手研究者にも経験してもらおうという意味での若手研究者育成においても、一定の成果があったと考えている。この2点は、「東アジア文化圏」の研究基盤の構築において、土台作りとなったのではと考えている。最終年度の研究活動は初年度以来の研究蓄積の上に展開、その結果、東アジア文化圏が近代化によって「自」「他」の折り合いをつけて生み出した芸能、及びグローバル化の影響を受けて、近代化の下、否定した自らの観劇行為の形に近い形が創出される現象から、近代化、グローバル化の中、生み出された芸能は、当地の文化コードとの関係性から考えた場合、翻案域に留まるのではないか、という新たな問題を抽出できた。今後は、この問題を巡って研究活動を科研により継続する。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①宮信明、「長編人情噺時代の話法——円朝・燕枝・柳桜——」、『立教大学日本文学』、第126号、2021年7月、pp.46-58
  - ① 宮信明、「三題噺「小三治」「江戸落語」「脱構築」」、『ユリイカ』、通巻784号、2022年1月、pp.99-108
  - ① 中野正昭、「ピエル・ブリアント他観劇写真貼込帖の考証」『栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究昭和初期の演劇・映画と音楽』成果報告(2018～2021年度)、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点、2022年2月
  - ② 後藤隆基編、『小劇場演劇とは何か』、ひつじ書房、2022年3月
  - ②後藤隆基編『ロスト・イン・パンデミック——失われた演劇と新たな表現の地平』、春陽堂書店、2021年6月
  - ③「東アジア大衆演劇若手研究者国際論壇(東亞大衆戲劇青年學者国際論壇)商業と芸術の間(商業與藝術之間)」、2021年7月10日・11日、立教大学(オンライン)
  - ③「移轉の大衆戲劇: 民眾記憶的顯影與體制的重建(移行する大衆演劇-大衆の記憶の表象と制度)」、2021年12月10日・11日、台湾・台北芸術大学(主催)+非台湾居住者(オンライン)
  - ④後藤隆基・柴田康太郎編『新派 SHIMPA——アヴァンギャルド演劇の水脈』図録、早稲田大学演劇博物館、2021年10月
  - ④ 後藤隆基、「別役実の宮沢賢治受容——『銀河鉄道の夜』を視座として」、表象文化論学会第15回大会(オンライン)、2021年7月4日
  - ⑤ 宮信明、「演芸速記のリアリティ」、表象文化論学会第15回大会(オンライン)、2021年7月4日
  - ④中野正昭「筑紫美主子劇団にみる商業俄のドラマ性」日本演劇学会・研究集会、パネル発表『ドラマか非ドラマか? ——地域市民演劇としての俄を考える』大阪大学、2021年12月
  - ④細井尚子編著「移轉の大衆戲劇: 民眾記憶的顯影與體制的重建(移行する大衆演劇-大衆の記憶の表象と制度)」論文集 2022年4月(本学機関リポジトリ)
- 【講演】岡崎哲也「伝統演劇である「歌舞伎」を、民間企業、松竹がいかに125年経営し続けてきたか。それを可能にしたものは何か。」
- 【論文】
- 輪島裕介「『道頓堀ジャズ』から『ドドンパ』へ: 貫戦期大阪の歌と踊り」
- 後藤隆基「関西新派と静間小次郎——20世紀初頭の京都劇壇における革新性と大衆性」
- 宮 信明 「吉本の興行〈戦略〉——創業から大合同までを中心に」
- 徐 亜湘「新劇中興之後: 上海笑舞台的新劇演出及其時代意義分析(1915-1929)」
- 羅 仕龍「摩登的末世感? ——1940年代上海大衆戲劇裡的機器人與未來想像」
- 林 乃文「『抒情傳統』與『現代性感知』的交錯敘事: 以上海文明戲《空谷蘭》為例」
- 藤崎 景「新派における『探偵劇』上演とそのメロドラマ性についての試論」
- 松本俊樹「戦間期と戦時下宝塚(国民座/歌劇)における楠木正成表象の相違——堀正旗『大楠公』(1929)『桜井の駅』(1944)を例に——」
- 洪 榮林「韓國大學路 openrun 演出的形成與生存模式」
- 海 震「傳説、記録、記憶及追憶: 『俗界大王』譚鑫培唱腔的『物質化』及『經典化』」
- 簡 秀珍「穿越邊界的演藝流動——以天勝一座帶回日本本土與自外地來團的表演者為討論中」
- 中野正昭「俠客と女劍劇——籠寅興行部と大江美智子一座にみる大衆演劇の興行展開——」
- 王 樂水「東京娛樂市場的演出公司研究(1934-1945)——松竹和東寶的戲劇演出為中心——」
- 細井尚子「演劇の2タイプから見る日本の娛樂市場における『西洋』受容」
- 劉 建幟「編導奇巧劇團《鞍馬天狗》之大衆元素運用」
- 程 筱媛「共構通俗文藝市場: 從小說、電影到京劇連臺本戲《火燒紅蓮寺》」
- 洪 唯薇「從輿論場到演出場——淺析1940年代的申曲改良(以文濱劇團為例)」